

自己の重要領域からみた青年期における劣等感の発達的变化

高坂 康雅*

本研究の目的は、青年期における劣等感の発達的变化を、自己の重要領域との関連から明らかにすることである。中学生・高校生・大学生 549 名に、予備調査から選択された劣等感項目 50 項目への回答と、自己の重要領域に関する自由記述を求めた。劣等感項目は予備調査と同様の 8 因子が抽出され、自己の重要領域に関する記述は 10 カテゴリーに分類された。自己の重要領域と劣等感得点との関連を検討したところ、中学生では知的能力を重要領域としており、学業成績の悪さに劣等感を感じ、高校生では対人魅力を重要領域としており、身体的魅力のなさに劣等感を感じていた。そして、大学生になり、自己承認を重要領域とするようになると友達づくりの下手さに劣等感を感じるが、人間的成熟を重要領域とするようになると劣等感はあまり感じられなくなることが明らかとなった。

キーワード：劣等感, 自己の重要領域, 青年期

問 題

青年期は、急激な身体的変化によって始まる。この身体的変化には大きな個人差があり、明らかな他者との差異は、青年の目を自己に向けさせる。また、身体的変化により、自己評価が不安定となり、自己の価値を確認するために他者の視線を気にしたり、何かにつけて他者と比較をしてしまう(高田, 1992)。さらに、青年期に相当する中学生や高校生には、それぞれ高校受験・大学受験があり、社会からも競争を強要されている状態にある。そのうえ、「格差社会」などの言葉が頻繁に聞かれる現代社会では、社会全体が他者との差や自他の相対的な位置を強く意識している状態にあると言える。このような心理状態・社会状態に置かれているため、青年期は他の時期に比べ劣等感が強まる時期なのであろう(返田, 1986)。

青年期の劣等感については、過去に多くの論及(宮城, 1979; 関, 1981; 返田, 1986 など)がなされている一方、実証的な研究は少ないのが現状である(落合, 1994)。また、実証的研究の多くは、劣等感が生じる領域(劣等感の種類)を分類した研究である。郷古(1972)は事件少年による自由記述から劣等感を環境的・性格的・能力的・身体的の 4 種類に分類している。また、安塚(1982)は、看護学生に対する自由記述調査を行い、劣等感を自己の身体・容貌に対する劣等感、自己の能力に対す

る劣等感、家族・友人に対する劣等感、自己の性格に対する劣等感の 4 種類に分類している。ただし、家族・友人に対する劣等感は、比較対象に関する分類であり、他の 3 分類とは質的に異なる。井上(1987)は小・中学生を対象とした劣等感に関する自由記述を能力要因・性格行動要因・身体要因・社会経済要因の 4 種類に分類している。これらの研究は、自由記述をもとに劣等感を分類した研究であるが、分類基準は研究者の視点で異なるため、類似した名称の分類であっても、内容が必ずしも一致しているとは言いがたい。また、統計的手法によって劣等感を分類した研究としては安塚(1984)があり、因子分析の結果、自己中心性に対する劣等感、容姿に対する劣等感、内向性に対する劣等感、能力に対する劣等感の 4 因子が抽出されている。しかし、調査対象者が女性のみ 66 名であり、また項目作成に先行文献が考慮されているとは言えないなど、問題点が多い。実証的研究の中には、いくつかの種類を前提としたチェックリストを作成し、劣等感の程度を測定している研究もある(Allport, 1939; Gardner & Pierce, 1929; 岸田, 1951; 西平, 1964 など)。これらの研究で用いられているチェックリストはいずれも劣等感を 4 種類に分けているが、この分類も作成者が独自で設定しているため、同じような項目であっても分類が異なる場合がある(例えば、「人づきあいが悪い」を岸田(1951)は性格行動に分類しているが、西平(1964)は社会的劣等感に分類している)。このように、劣等感に関する実証的研究は少なく、そこで行われている分類や作成されているチェックリストは、内容的・方法的に適切であるとは言いがたいのが現状である。

* 筑波大学大学院人間総合科学研究科
〒305-0006 茨城県つくば市天王台 1-1-1
筑波大学 心理学系事務室
yasu-ksk@human.tsukuba.ac.jp

このような現状であるため、実証的劣等感研究では、一貫した研究成果が得られているとは言えないが、いくつかの研究において、児童期から青年期にかけて強く感じられる劣等感の種類が変化することが指摘されている。岸田(1951)は小・中学生を対象とした調査を実施し、小学生では社会経済的要因が強く、中学生になるにつれて身体的要因、才能的要因、性格行動的要因がみられるようになることを示し、井上(1987)は、小・中学生を対象とした自由記述調査から、小学校低学年では運動能力による劣等感の記述が多くみられるが、小学校高学年から中学生にかけては、運動能力よりも知的能力による劣等感の記述が多くみられると報告している。塚野・水島(1997)は、小学3・5年生、中学1・3年生、高校2年生を対象とした調査を行い、高校2年生では身体・能力・性格・社会という4種類すべての劣等感が他の学年よりも強く、また小学生よりも中学生の方が能力に関する劣等感が強いことを明らかにしている。

では、これらの研究のように、児童期から青年期にかけて、強く感じられる劣等感の種類が変化するのはなぜだろうか。人はそれぞれ多くの劣性をもっているが、すべての劣性に対して劣等感を抱くわけではない。戸川(1952)は劣等感成立の重要な条件として、「劣性はその人の生活の重要な部分における劣性である」ことをあげており、水間(2000)も「劣等感は他者と個人との比較によってのみ成り立つわけではなく、それを重要たらしめる個人の価値観や要求水準など自己の問題が深く関わって体験される」と述べているように、自己のどの側面に劣等感を抱くかは、個人が重要としている自己の領域(以下、これを“自己の重要領域”とする)と関連していることが指摘されている。つまり、青年は多くの劣性をもっているが、そのうち、自分が重要であるとしている領域においてこそ劣等感を抱くと考えられる。

どの領域を重要とするかは、劣等感に限らず、自己評価(遠藤, 1992; Moretti & Higgins, 1990など)や妬み感情(Bers & Rodin, 1984; 澤田・新井, 2002など)、自己認知(山本・松井・山成, 1982など)、コンピテンス(Elliot, Faler, McGregor, Campbell, Sedikides, & Harackiewicz, 2000など)などとの関連が示されている。遠藤(1992)は、領域の重要度による理想自己と自己評価との関連について検討し、「正の理想自己とともに負の理想自己においても、個人にとって重要な次元での自己認知が全体的自己評価に強く関わっている」(遠藤, 1992)ことを示した。また、澤田・新井(2002)は、領域重要度が妬み感情の

生起に与える影響について調査を実施し、中学生で成績・運動・財産・技術の4領域すべてにおいて、領域重要度の影響によって妬み感情が強まるという結果を示した。自己認知研究においては、山本ら(1982)が、大学生において、認知される自己の諸側面のなかでも、個人にとって重要な側面に関する自己認知が、自尊感情に強く影響していることを示している。この結果は、小学生・中学生を対象にした遠藤・西(1993)や、高校生を対象とした三田(1988)でも、支持されている。コンピテンス研究では、ある課題を遂行することが、自分にとって重要なものであるという重要度の認知(有能感価値)が、内発的動機づけを高めることが明らかにされている(Elliotら, 2000)。このように、自己評価や自己認知から生じる感情には、どの領域を重要としているかが関わっており、青年がどの領域に劣等感を強く抱くかについても、自己の重要領域が関わっていると考えられる。

また、山田(1989)は小学生から大学生にかけて、20答法での自己に関する記述内容が変化することを示し、溝上(1999)は「自己のあり方が問題となる領域は、青年期初期と後期とではずいぶん異なる」と述べている。これらのことから、自己の重要領域は青年期を通して変化することが考えられる。そして、自己の重要領域の変化に伴って、強く感じられる劣等感の領域も変化すると予測される。

以上のことから、青年期における劣等感の発達的变化を、自己の重要領域との関連から明らかにすることを本研究の目的とし、その目的に対して、以下の3つの手続きを通して検討する。①青年期において劣等感が生じる自己の側面を分類する。②学校段階を指標として、強く感じられる劣等感の発達的变化を明らかにする。③自己の重要領域の変化とそれに伴う劣等感の変化の対応について検討する。

本研究では、自己の重要領域に関する自由記述を求め、さらに記述したものの中からひとつだけ「最も重要であると思うもの」を選択してもらうという手続きをとった。溝上(1999)は、自己概念・自己評価研究における個性記述的観点の考慮の重要性を述べている。個性記述的観点の考慮とは、自己評価や自尊感情とある領域との関連について検討する場合に、その領域における「個人にとっての重要性」を考慮しなければならないということである(溝上, 1999)。そして、個性記述的観点を考慮した方法として、自由記述・文章完成法・20答法(Kuhn & McPartland, 1954)・WHY答法(溝上, 1995)のような“内在的視点による方法”を示してい

る。20 答法のような自由記述によって個人が表出する自己概念については、McGuire & Padawer-Singer (1976) が、被験者自身が自ら重要だとする次元を選択する余地のあるものであり、現在の動機や価値、様々な自己のなかでも比較的強度なものに関わりをもつと述べている。また、溝上 (1999) も WHY 答法で得られた記述が個人にとっての重要な領域を示していることを、部分的に確認している。また、Rogers (1951) は、理想自己を「個人が非常にそうありたいと望んでおり、それに最も高い価値をおいている自己概念」であると定義し、北村 (1962) も「理想的人間像とは、特定の個人または集団が、人間一般、特定の他者すなわち個人または集団もしくは自己について、もっとも望ましい、もっとも価値のある人間のあり方として心に抱くものである」と述べているように、理想自己や理想像には、個人がどの領域を重要としているかが反映されていると言える。そこで、これらの指摘を踏まえて、「もっと ___ 人間になりたい。」という未完成文章を提示し、内在的視点による方法である自由記述によって回答を求め、さらに記述したものの中からひとつだけ「最も重要であると思うもの」を選択してもらおうという手続きをとった。このような手続きを経ることで、よりの確に青年個人の重要領域を捉えることができると考える。

なお、本研究では、劣等感を「自分が人と比べて劣っていると感ずること」と定義する。

予備調査¹

目的

ここでは、青年期において劣等感が生じる自己の側面を分類することを目的とし、本調査で用いる劣等感の程度を測定する項目を選定するときの参考とする。

方法

対象者 I 県内の中学生 1～3 年生 251 名 (男子 118 名, 女子 133 名; 平均年齢 13.48 歳, 標準偏差 0.94 歳), I 県内の高校生 1・2 年生および H 県内の高校 3 年生 278 名 (男子 119 名, 女子 159 名; 平均年齢 16.41 歳, 標準偏差 0.91 歳), I 県内および H 県内の大学生 212 名 (男子 96 名, 女子 116 名; 平均年齢 20.25 歳, 標準偏差 1.49 歳) を調査対象者とした。

調査時期 2005 年 10-11 月。

調査内容 事前に中学生・高校生・大学生 293 名を対象に行った自由記述調査 (2005 年 9 月実施) の結果および文献 (返田, 1986 など) を参考に、15 カテゴリー・87 項目

の劣等感項目を作成した。作成された劣等感項目はすべて「〇〇な自分が人とくらべて劣っていると感ずる」という文章形式となっており、「普段どのくらい自分が人とくらべて劣っていると感ずますか」という教示のもと、「とても感ずる」(5 点), 「やや感ずる」(4 点), 「どちらともいえない」(3 点), 「あまり感ずない」(2 点), 「まったく感ずない」(1 点) の 5 件法で回答を求めた。

結果

87 項目に対して、最尤法による因子分析を行ったところ、固有値 1.0 以上で 16 因子が抽出された。そこで、因子数を 16 から徐々に減らしながら最尤法・promax 回転による因子分析を行い、因子の解釈から 8 因子解が適当であると判断された。8 因子での説明可能な分散の総和の割合は 50.41% であった。8 因子はそれぞれ、「性格の悪さ」, 「家庭水準の低さ」, 「統率力の欠如」, 「身体的魅力のなさ」, 「異性とのつきあいの苦手さ」, 「運動能力の低さ」, 「友達づくりの下手さ」, 「学業成績の悪さ」と命名された。

本調査では、この結果をもとに、劣等感項目を選定し、劣等感の発達的变化の検討に用いる。

本調査

目的

青年期における劣等感の発達的变化を、自己の重要領域との関連から明らかにする。

方法

調査対象者 M 県内の中学 1～3 年生 204 名 (男子 101 名, 女子 103 名; 平均年齢 13.25 歳, 標準偏差 0.92 歳), M 県内の工業高校 1～3 年生 173 名 (男子 98 名, 女子 75 名; 平均年齢 16.27 歳, 標準偏差 0.98 歳), I 県内の大学生 172 名 (男子 85 名, 女子 87 名; 平均年齢 19.88 歳, 標準偏差 1.19 歳) を調査対象者とした。

調査時期 2006 年 6-7 月。

調査内容 劣等感項目: 予備調査の結果をもとに、8 因子からそれぞれ 7, 8 項目を選定し、50 項目を使用した。教示・選択肢は予備調査と同様であった。

自己の重要領域についての記述: 既述の通り、本研究では青年の重要領域を把握するために、溝上 (1999) や水間 (2004) などを参考に、「もっと ___ 人間になりたい。」という未完成の文を 5 つ提示し、「あなたが『自分はいったいこういう人間になりたい』と思う理想の自分について、下線部に書き入れてください。」と教示をした。この際、必ず 3 つ以上記入するように求めた。次に、記述された文のうち、最も重要であると思う記述をひとつ選ぶように求めた。

¹ 予備調査の詳細は、日本青年心理学会第 14 回大会 (2006) にて発表した (高坂康雅 (2006). 青年期における劣等感の発達的变化 日本青年心理学会第 14 回大会発表論文集, 30-31.)

結果

劣等感項目の因子分析と得点化 劣等感項目 50 項目について、因子数を 8 に指定して、最尤法・promax 回転による因子分析を行ったところ、予備調査と同様の因子パターンを示した (Table 1)。8 因子での説明可能な分散の総和の割合は 59.14%であった。

第 1 因子は「異性にうまく声をかけられない自分が人にくらべて劣っていると感じる」(負荷量.93; 以下、項目文の「が人にくらべて劣っていると感じる」は省略)、「異性と仲良くなれない自分」(.89)など、異性とうまくつきあうことができないために感じられる劣等感であると考えられ、「異性とのつきあいの苦手さ」と命名した。第 2 因子は「頭が良くない自分」(.89)、「成績が悪い自分」(.87)のように、学校での成績が良くないために感じられる劣等感であると考えられ、「学業成績の悪さ」と命名した。第 3 因子は、「運動オンチな自分」(.93)、「運動神経が鈍い自分」(.90)など、運動がうまくできないことによって感じられる劣等感であると考えられ、「運動能力の低さ」と命名した。第 4 因子は「親が立派でない自分」(.90)、「親の学歴がよくない自分」(.84)など、親の地位・経歴や家庭環境がよくないことなどに対して感じられる劣等感であると考えられるため、「家庭水準の低さ」と命名した。第 5 因子は「悪口を言ってしまう自分」(.82)、「いじわるな自分」(.79)のように、自分の性格の悪さについて感じられる劣等感であると考えられるため、「性格の悪さ」と命名した。第 6 因子は「友達グループにうまく入れない自分」(.89)、「友達づきあいが下手な自分」(.75)のように、友達をつくるのがうまくできないことで感じられる劣等感であると考えられるため、「友達づくりの下手さ」と命名した。第 7 因子は「人に指示が出せない自分」(.82)、「リーダーシップがない自分」(.68)など、集団をまとめて導いていく力のなさによって感じられる劣等感であると考えられるため、「統率力の欠如」と命名した。第 8 因子は「スタイルがよくない自分」(.60)、「かっこよくない(かわいくない)自分」(.59)のように、容姿や容貌がよくないことから感じられる劣等感であると考えられるため、「身体的魅力のなさ」と命名した。

各因子に .35 以上の負荷を示した項目の α 係数を算出したところ (Table 1 最下段)、.93~.80 と十分な内的一貫性が確認されたため、各因子に .35 以上の負荷を示している項目の平均値を算出し、各得点を作成した (第 1 因子「異性とのつきあいの苦手さ」の得点を「異性とのつきあいの苦手さ」得点」と呼び、以下同様)。

学校段階による劣等感 8 得点の比較 劣等感 8 得点の

学校段階による変化を検討するため、劣等感には性差がみられることが指摘されている (関, 1981; 國眼, 1997 など) ことを踏まえて、学校段階 (3) × 性 (2) の 2 要因分散分析を行った (Table 2)。

分散分析の結果、「家庭水準の低さ」得点で交互作用が認められた ($F(2,543)=5.50, p<.01$)。単純主効果の検定 (Bonferroni 法・5%水準) を行ったところ、女子において、高校生、中学生、大学生の順に得点が高いことが明らかとなった。また、「異性とのつきあいの苦手さ」得点 ($F(2,543)=8.69, p<.001$)、「学業成績の悪さ」得点 ($F(2,543)=5.04, p<.01$)、「友達づくりの下手さ」得点 ($F(2,543)=9.83, p<.001$)、「身体的魅力のなさ」得点 ($F(2,543)=7.79, p<.001$) で学校段階の有意な主効果がみられた。多重比較 (Tukey 法・5%水準) を行ったところ、「異性とのつきあいの苦手さ」得点では高校生が中学生よりも、「学業成績の悪さ」得点では中学生が大学生よりも、「友達づくりの下手さ」得点では高校生・大学生が中学生よりも、「身体的魅力のなさ」得点では高校生が中学生・大学生よりも、それぞれ高い得点であることが明らかとなった。さらに、「学業成績の悪さ」得点 ($F(1,543)=5.14, p<.05$)、「運動能力の低さ」得点 ($F(1,543)=13.40, p<.001$)、「友達づくりの下手さ」得点 ($F(1,543)=14.88, p<.001$)、「身体的魅力のなさ」得点 ($F(1,543)=55.70, p<.001$) において、性の有意な主効果がみられ、いずれも女子の方が男子よりも得点が高かった。

以上の結果から、中学生では学業成績の悪さによる劣等感が、高校生では異性とのつきあいの苦手さ、友達づくりの下手さ、身体的魅力のなさによる劣等感が、大学生では友達づくりの下手さによる劣等感が、それぞれ特徴的にみられることが明らかとなった。

自己の重要領域に関する記述の分類 記入された記述のうち、「最も重要だと思うもの」として選ばれた記述について分類を行った。この際、中学生 3 名、高校生 6 名、大学生 5 名が、「最も重要だと思うもの」について回答していなかったため、それらを除外し、中学生 201 名、高校生 167 名、大学生 167 名、合計 535 名の記述が分類の対象となった。

著者を除いた心理学を専攻する大学院生 3 名が、調査内容の説明を受けた後、記述内容の類似性をもとに分類を行った。分類の結果を Table 3 に示す。記述は 10 カテゴリーに分類された。分類された後、分類された記述の内容および分類時の議論から、著者がカテゴリー名を決定した。

ここから、青年における自己の重要領域は 10 領域に分類できることが明らかとなった。

Table 1 劣等感項目の因子パターン (最尤法・promax回転後)

項目内容	F1	F2	F3	F4	F5	F6	F7	F8	h^2	平均(標準偏差;人数)
第1因子: 異性とのつきあいの苦手さ										
37: 異性にうまく声をかけられない自分 (異性)	.93	-.03	.05	.04	-.02	-.03	-.05	-.03	.80	2.75(1.36; 549)
45: 異性と仲良くなれない自分 (異性)	.89	.04	.03	.04	-.02	.07	-.07	-.10	.80	2.65(1.31; 549)
34: 異性とのつきあいが苦手な自分 (異性)	.84	.02	-.01	-.08	-.02	.11	.00	.01	.78	2.79(1.31; 548)
9: 異性と話すのが苦手な自分 (異性)	.78	-.09	-.03	-.05	-.03	-.15	.22	.18	.71	2.87(1.34; 548)
21: 異性の前で緊張してしまう自分 (異性)	.76	.04	-.10	.03	-.01	-.09	.08	.15	.64	2.73(1.35; 547)
25: 異性と親密な関係をつくれない自分 (異性)	.76	-.04	-.02	-.01	.03	.07	-.07	.06	.59	2.81(1.30; 545)
第2因子: 学業成績の悪さ										
29: 頭がよくない自分 (学業)	.02	.89	.06	-.08	.04	-.06	-.02	.03	.79	2.95(1.31; 548)
17: 成績が悪い自分 (学業)	-.06	.87	-.02	-.06	.02	-.05	.07	.08	.76	2.98(1.30; 546)
49: 学力が低い自分 (学業)	-.02	.83	.06	.03	-.06	.09	.01	-.04	.77	2.79(1.33; 549)
41: 成績が伸びない自分 (学業)	.02	.82	-.01	.02	-.03	.06	-.10	.05	.70	2.89(1.35; 548)
5: 勉強ができない自分 (学業)	-.03	.82	-.11	-.06	-.02	-.15	.15	.14	.65	3.15(1.28; 546)
44: 試験の結果がよくない自分 (学業)	.02	.81	-.04	.09	-.01	.06	-.01	-.11	.66	2.87(1.32; 549)
第3因子: 運動能力の低さ										
38: 運動オンチな自分 (運動)	.01	-.03	.93	-.02	.03	.04	-.04	-.03	.83	2.59(1.38; 549)
16: 運動神経が鈍い自分 (運動)	-.05	.00	.90	-.08	-.01	-.01	.00	.11	.82	2.77(1.39; 549)
48: 運動がなかなかうまくならない自分 (運動)	.01	-.02	.82	.06	.00	.08	.04	-.13	.72	2.60(1.35; 548)
1: スポーツが苦手な自分 (運動)	-.05	-.12	.81	-.05	-.05	-.12	.13	.19	.66	2.99(1.35; 549)
28: 体力がない自分 (運動)	.02	.15	.66	-.05	.06	-.01	-.04	-.04	.51	2.82(1.38; 547)
4: 走るのが遅い自分 (運動)	.02	-.02	.63	.04	-.05	-.16	.06	.24	.51	2.90(1.34; 546)
第4因子: 家庭水準の低さ										
47: 親が立派でない自分 (家庭)	.04	-.11	.05	.90	-.02	.03	.01	-.10	.74	1.72(0.96; 549)
31: 親の学歴がよくない自分 (家庭)	-.07	-.02	-.06	.84	-.05	.03	.02	.00	.62	1.72(0.97; 545)
43: 家があまり裕福でない自分 (家庭)	.04	.07	-.01	.76	.05	-.02	-.02	-.05	.63	1.93(1.08; 548)
19: 家庭環境がよくない自分 (家庭)	.01	-.02	-.07	.70	.12	-.14	.07	.14	.57	2.01(1.13; 547)
12: 親の仕事を自慢できない自分 (家庭)	-.02	-.05	-.03	.70	-.02	.06	.04	.05	.51	1.96(1.10; 548)
7: 家柄がよくない自分 (家庭)	-.05	.10	-.05	.51	-.06	-.08	.16	.23	.45	2.06(1.16; 549)
40: 身長が低すぎる(高すぎる)自分 (身体)	.11	.08	.12	.26	.06	-.02	-.07	.11	.24	2.40(1.31; 549)
第5因子: 性格の悪さ										
15: 悪口を言ってしまう自分 (性格)	.06	.04	-.01	.00	.82	-.06	-.19	-.04	.54	2.94(1.26; 546)
24: いじわるな自分 (性格)	-.01	-.07	-.03	.11	.79	.03	-.02	-.04	.61	2.66(1.24; 548)
10: 人のせいにしてしまう自分 (性格)	.03	.06	-.03	-.08	.76	-.02	.09	.04	.56	2.97(1.28; 549)
18: 人を思いやることができない自分 (性格)	-.03	-.04	-.03	-.09	.69	.08	.03	.09	.50	2.87(1.28; 549)
27: うそをついてしまう自分 (性格)	-.05	.08	-.01	.03	.68	-.06	.13	-.06	.52	2.84(1.22; 549)
33: 短気な自分 (性格)	.02	.02	.07	.07	.59	.01	-.07	.00	.42	2.69(1.28; 549)
6: わがままな自分 (性格)	-.17	.00	.05	.03	.54	-.01	.07	.18	.43	2.84(1.25; 549)
第6因子: 友達づくりの下手さ										
35: 友達グループにうまく入れない自分 (友達)	-.06	.01	-.05	.01	-.10	.89	.04	.07	.71	2.70(1.29; 548)
23: 友達つきあいが下手な自分 (友達)	.03	-.03	-.05	-.08	.11	.75	.07	.05	.66	2.84(1.31; 546)
39: うまく友人と話せない自分 (友達)	-.01	.00	.08	.01	-.01	.74	-.03	.06	.61	2.44(1.24; 548)
11: うまく人間関係をつくれない自分 (友達)	.01	-.08	-.10	-.14	.04	.74	.07	.22	.59	3.12(1.29; 548)
42: 仲のよい友人がつくれない自分 (友達)	.01	-.08	.03	.14	.05	.69	-.08	-.10	.61	2.37(1.23; 549)
14: 友人が少ない自分 (友達)	.02	-.06	-.05	.05	-.04	.69	.05	.08	.50	2.42(1.22; 546)
第7因子: 統率力の欠如										
8: 人に指示が出せない自分 (統率)	-.04	-.04	.01	.10	-.07	-.06	.82	.09	.64	2.74(1.28; 546)
46: リーダーシップがない自分 (統率)	.08	.05	.11	.07	.02	.12	.68	-.28	.71	2.85(1.31; 547)
50: グループをまとめられない自分 (統率)	.04	.06	.05	.11	.01	.20	.64	-.27	.69	2.70(1.27; 548)
3: 消極的な自分 (統率)	-.05	.00	-.02	-.09	-.08	.28	.41	.23	.38	3.11(1.26; 548)
26: 自分の意見がはっきり言えない自分 (統率)	.07	.11	.02	-.06	.08	.00	.39	-.04	.26	3.20(1.80; 549)
22: 決断力がない自分 (統率)	.17	.03	.04	-.11	.26	.09	.35	.01	.47	3.08(1.37; 547)
第8因子: 身体的魅力のなさ										
13: スタイルがよくない自分 (身体)	.04	.02	.09	.03	.01	.14	-.10	.60	.52	3.01(1.27; 542)
2: かっこよくない(かわいくない)自分 (身体)	.08	.07	.07	-.09	.03	.03	-.03	.59	.46	3.41(1.18; 548)
20: 顔が丸い(細い)自分 (身体)	.07	-.01	.05	.16	.04	.09	-.05	.51	.48	2.58(1.25; 549)
30: 太っている(やせている)自分 (身体)	.00	.11	.18	.13	.00	.09	-.06	.44	.51	2.78(1.35; 549)
32: 足が短い自分 (身体)	.05	.12	.05	.21	.04	.07	-.09	.33	.36	2.40(1.29; 549)
36: 体つきが男(女)らしくない自分 (身体)	.04	.07	.13	.11	.02	.17	-.02	.27	.35	2.42(1.24; 548)
因子間相関 (左下)・得点間相関 (右上)										
異性	-	.34	.36	.35	.28	.55	.51	.44		
学業	.36	-	.46	.44	.43	.45	.47	.52		
運動	.38	.51	-	.35	.37	.44	.42	.55		
家庭	.37	.48	.40	-	.37	.42	.39	.44		
性格	.31	.47	.43	.40	-	.49	.43	.43		
友達	.57	.49	.49	.45	.54	-	.61	.46		
統率	.52	.46	.43	.38	.45	.60	-	.40		
身体	.37	.48	.48	.37	.37	.35	.37	-		
負荷量が.35以上の項目の α 係数										
	.93	.93	.92	.88	.87	.90	.80	.81		

- a) 項目後の「が人とからべて劣っていると感じる」は省略した
- b) 項目後の()内は予備調査の因子名(略称)
- c) 負荷量.35以上を太線枠で囲った

Table 2 劣等感 8 得点の 2 要因分散分析結果 (学校段階×性)

	中学生	高校生	大学生	F 値		
				学校段階	性	交互作用
異性とのつきあいの苦しさ						
男子	2.47(1.11)	3.12(1.16)	2.89(1.28)	8.69***	<i>n.s.</i>	<i>n.s.</i>
女子	2.59(1.13)	2.92(1.04)	2.67(1.03)	高>中		
学業成績の悪さ						
男子	2.97(1.16)	2.88(1.08)	2.62(1.18)	5.04**	5.14*	<i>n.s.</i>
女子	3.21(1.34)	3.10(0.90)	2.83(1.01)	中>大	女>男	
運動能力の低さ						
男子	2.46(1.11)	2.71(1.13)	2.65(1.16)	<i>n.s.</i>	13.40***	2.73 ⁺
女子	3.10(1.16)	3.04(1.00)	2.74(1.16)		女>男	
家庭水準の低さ						
男子	1.86(0.74)	1.89(0.76)	1.75(0.88)	12.26***	4.70*	5.50**
女子	1.98(0.91)	2.36(0.91)	1.62(0.74)			女:高>中>大
性格の悪さ						
男子	2.75(0.88)	2.75(0.86)	2.82(1.08)	2.40 ⁺	2.79 ⁺	2.87 ⁺
女子	2.75(0.97)	3.17(0.84)	2.81(0.97)			
友達づくりの下手さ						
男子	2.27(0.86)	2.48(0.88)	2.78(1.14)	9.83***	14.88***	<i>n.s.</i>
女子	2.58(1.10)	2.97(0.88)	2.96(1.08)	高・大>中	女>男	
統率力の欠如						
男子	2.87(0.99)	2.79(0.91)	2.87(1.15)	<i>n.s.</i>	3.64 ⁺	<i>n.s.</i>
女子	2.90(1.07)	3.06(0.94)	3.08(1.19)			
身体的魅力のなさ						
男子	2.60(0.95)	2.82(0.83)	2.56(0.83)	7.79***	55.70***	<i>n.s.</i>
女子	3.13(1.07)	3.58(0.99)	3.11(1.02)	高>中・大	女>男	

a) ⁺ $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

各学校段階における自己の重要領域の特徴 分類された記述数が全回答者の5%未満であった「人望」(16名; 3.0%)と「社会・経済的地位」(10名; 1.9%)は、記述数(回答者数)が少なかったため、一般的特徴を捉えることや、のちの統計的処理に適さないと判断し、これからの分析から除外することとした。

これらのカテゴリーを除外した自己の重要領域(8)と学校段階(3)のクロス集計表を作成し、 χ^2 検定を行った(Table 4)。残差分析の結果から、中学生では「知的能力」に分類された回答者(「知的能力」群と呼び、以下同様)が多く、高校生では「対人魅力」群が多く、大学生では「自己承認」群や「人間的成熟」群が多いことが明らかとなった。

自己の重要領域における劣等感8得点の特徴 自己の重要領域の分類ごとに劣等感8得点の平均(標準偏差)を算出した(Table 5)。Table 5から、「優しさ」群では劣等感8得点の中で「性格の悪さ」得点が高く、「知的能力」群では「学業成績の悪さ」得点、「人づきあい」群では「異性とのつきあいの苦しさ」得点、「対人魅力」群では「身体的魅力のなさ」得点、「積

極性」群では「統率力の欠如」得点が高く、それぞれ最も高い得点を示している。ここから、青年の重要領域と劣等感にはある程度の関連があると言えよう。

劣等感8得点について、自己の重要領域を要因とした分散分析を行った。その結果、「学業成績の悪さ」得点($F(7,501)=2.38, p < .05$)、「異性とのつきあいの苦しさ」得点($F(7,501)=3.00, p < .01$)、「身体的魅力のなさ」得点($F(7,501)=2.92, p < .01$)、「統率力の欠如」得点($F(7,501)=2.29, p < .05$)、「友達づくりの下手さ」得点($F(7,501)=2.13, p < .05$)で、要因による有意な差がみられたので、多重比較(Tukey法・5%水準)を行ったところ、「学業成績の悪さ」得点では「知的能力」群が「優しさ」群と「人間的成熟」群に比べ有意に高い得点であった。「異性とのつきあいの苦しさ」得点では「身体能力」群と「人づきあい」群が「優しさ」群よりも有意に高い得点を示した。「身体的魅力のなさ」得点では「対人魅力」群が「優しさ」群や「人間的成熟」群よりも有意に高い得点を示した。「統率力の欠如」得点では「積極性」群が「優しさ」群よりも有意に高い得点を示した。「友達づくりの下手さ」得点では「人づきあい」群が「優し

Table 3 自己の重要領域に関する記述の分類

領域	学校段階	中学生	高校生	大学生	合計	記述例
優しさ		44	31	25	100	優しい人間
		(24 : 20)	(14 : 17)	(15 : 10)	(53 : 47)	思いやりのある人間
		21.9%	18.6%	15.0%	18.7%	人の役に立てる人間
知的能力		44	15	21	80	頭のよい人間
		(19 : 25)	(10 : 5)	(9 : 12)	(38 : 42)	勉強ができる人間
		21.9%	9.0%	12.6%	15.0%	理解力のある人間
人づきあい		35	28	17	80	社交的な人間
		(16 : 19)	(17 : 11)	(9 : 8)	(42 : 38)	友達づきあいが上手い人間
		17.4%	16.8%	10.2%	15.0%	異性と仲良くなれる人間
人間的成熟		21	17	39	77	しっかりした人間
		(10 : 11)	(10 : 7)	(17 : 22)	(37 : 40)	考えて行動できる人間
		10.4%	10.2%	23.4%	14.4%	自立した人間
積極性		17	17	21	55	積極的な人間
		(9 : 8)	(14 : 3)	(8 : 13)	(31 : 24)	はっきり物事の言える人間
		8.5%	10.2%	12.6%	10.3%	行動力のある人間
対人魅力		6	29	13	48	かっこいい (かわいい) 人間
		(0 : 6)	(8 : 21)	(7 : 6)	(15 : 33)	スタイルの良い人間
		3.0%	17.4%	7.8%	9.0%	人に好かれる人間
身体能力		20	17	5	42	運動が得意な人間
		(17 : 3)	(15 : 2)	(3 : 2)	(35 : 7)	スポーツが上手な人間
		10.0%	10.2%	3.0%	7.9%	体力のある人間
自己承認		7	6	14	27	自信が持てる人間
		(2 : 5)	(4 : 2)	(8 : 6)	(14 : 13)	自分を好きになれる人間
		3.5%	3.6%	8.4%	5.0%	充実した人間
人望		7	1	8	16	人から尊敬される人間
		(3 : 4)	(1 : 0)	(2 : 6)	(6 : 10)	人に頼られる人間
		3.5%	0.6%	4.8%	3.0%	人をまとめることができる人間
社会・経済的地位		0	6	4	10	有名な人間
		(0 : 0)	(3 : 3)	(3 : 1)	(6 : 4)	お金持ちな人間
		0.0%	3.6%	2.4%	1.9%	家が裕福な人間
合計		201	167	167	535	
		(100 : 101)	(96 : 71)	(81 : 86)	(277 : 258)	
		100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	

a) 1 段目が人数, 2 段目が性 (男 : 女), 3 段目が各学校段階における割合 (%) を表す
 b) 上から記述数の多い順に並べた

Table 4 自己の重要領域に関する記述と学校段階のクロス集計表

領域	優しさ	身体能力	知的能力	人づきあい	対人魅力	積極性	自己承認	人間的成熟
中学生	44	20	44	6	6	17	7	21
	22.7%	10.3%	22.7%	3.1%	3.1%	8.8%	3.6%	10.8%
	1.4	1.3	3.4	1.1	-3.8	-1.2	-1.3	-2.1
高校生	31	17	15	28	29	17	6	17
	19.4%	10.6%	9.4%	17.5%	18.1%	10.6%	3.8%	10.6%
	-0.1	1.3	-2.7	0.7	4.5	-0.1	-1.1	-1.9
大学生	25	5	21	17	13	21	14	39
	16.1%	3.2%	13.5%	11.0%	8.4%	13.5%	9.0%	25.2%
	-1.3	-2.7	-0.9	-1.9	-0.5	1.3	2.5	4.2

a) 1 段目が人数, 2 段目が各学校段階における割合 (%), 3 段目が調整済み標準化された残差を表している
 b) 残差が 2.0 以上の値は太線で囲み, -2.0 以下の値は点線で囲った
 c) 記述のカテゴリーは各学校段階における割合および χ^2 検定の結果をもとに並べなおした

Table 5 自己の重要領域を要因とした劣等感8得点の分散分析

劣等感	領域 全体 人数	優しさ (優) 100名	身体能力 (身) 42名	知的能力 (知) 80名	人づきあい (人) 80名	対人魅力 (魅) 48名	積極性 (積) 55名	自己承認 (承) 27名	人間的成熟 (成) 77名	F値	多重比較
学業成績の悪さ	2.95 (1.14)	2.75 (1.15)	2.98 (1.13)	3.38 (1.20)	2.91 (1.20)	2.88 (1.12)	3.08 (1.00)	2.84 (1.12)	2.82 (1.06)	2.38*	知>成・優
異性とのつきあいの 苦手さ	2.79 (1.14)	2.40 (1.06)	3.03 (1.17)	2.86 (1.13)	3.03 (1.17)	2.96 (1.13)	2.92 (1.12)	2.82 (0.97)	2.66 (1.19)	3.00**	身・人>優
身体的魅力のなさ	2.96 (1.02)	2.79 (1.07)	2.86 (0.95)	3.12 (0.96)	3.11 (0.98)	3.41 (1.13)	2.88 (0.90)	2.76 (0.96)	2.78 (1.03)	2.92**	魅>成・優
統率力の欠如	2.93 (1.02)	2.68 (0.98)	2.79 (1.07)	3.02 (1.03)	2.98 (1.05)	3.00 (0.95)	3.30 (1.04)	3.00 (0.76)	2.85 (1.06)	2.29*	積>優
友達づくりの下手さ	2.67 (1.02)	2.43 (0.99)	2.58 (0.94)	2.56 (0.95)	2.93 (1.05)	2.82 (1.05)	2.68 (0.96)	2.94 (0.92)	2.69 (1.17)	2.13*	人>優
運動能力の低さ	2.80 (1.14)	2.63 (1.11)	2.82 (1.14)	2.98 (1.21)	2.78 (1.20)	2.81 (1.04)	2.89 (1.04)	2.92 (1.26)	2.74 (1.15)	n.s.	
家庭水準の低さ	1.90 (0.86)	1.74 (0.77)	1.85 (0.75)	1.96 (0.86)	2.06 (0.96)	2.05 (0.96)	1.93 (0.89)	1.96 (0.79)	1.77 (0.81)	n.s.	
性格の悪さ	2.85 (0.94)	2.86 (1.05)	2.86 (0.91)	2.69 (0.95)	2.94 (0.95)	2.94 (0.86)	2.86 (0.85)	2.69 (0.96)	2.89 (0.93)	n.s.	

a) 多重比較の省略は、自己の重要領域名の下に付した()内と同一である

b) 各劣等感得点において、全体平均よりも高いものには網掛けをし、最高得点は太線枠で、最低得点は点線枠で囲った

c) 記述のカテゴリーはTable 4に合わせた。また劣等感8得点は分析結果をもとに並べなおした

d) * $p < .05$ ** $p < .01$

さ」群よりも有意に高い得点を示した。

考 察

劣等感の分類と発達の变化について 本研究の目的は、青年期における劣等感の発達の变化を、自己の重要領域との関連から、明らかにすることであった。

まず、劣等感項目の因子分析を行ったところ、予備調査と同様の8因子が再度抽出された。先行文献と自由記述をもとに項目が作成され、2度(予備調査と本研究)の因子分析でも同様の因子が得られたことから、本研究で用いた劣等感項目は、青年の劣等感の程度を把握する上で、構造的に安定したものであるといえよう。

次に、劣等感8得点を学校段階で比較したところ、中学生では「学業成績の悪さ」得点が、高校生では「異性とのつきあいの苦手さ」得点、「友達づくりの下手さ」得点、「身体的魅力のなさ」得点が、大学生では「友達づくりの下手さ」得点が、それぞれ高い得点を示していることが明らかとなった。

自尊感情に与える自己の諸領域の影響に関する研究の中で、遠藤・西(1993)では中学3年生において学力が自尊感情に強く影響していることが明らかとされており、三田(1988)では、「SE(Self-Esteem)の高低を決める要因として、高校生の場合男女とも自己の外面的

な側面をどの程度気にするか、という要因が大きく関与している」や「(大学生においては)不安を抱かない対人関係がSEを支えるためのひとつの要因に充分なり得る」と指摘されている(カッコ内は筆者)。中学生における学業、高校生における自己の外面的な側面、大学生における不安を抱かない対人関係が、それぞれ自尊感情に影響を与えていることから、それらが低かったり悪かった場合には、自尊感情が低下し、そこから劣等感を生じさせる要因となりうると考えられる。本研究で得られた学校段階間の差は、遠藤・西(1993)や三田(1988)の結果と照らして、妥当なもの判断できよう。

自己の重要領域と劣等感との関連について 自由記述のなかから「最も重要だと思うもの」として選ばれた記述を分類したところ、自己の重要領域は10領域に分類された。自己の重要領域の分類について、学校段階ごとの人数比を検討したところ、中学生では「知的能力」群が多く、高校生では「対人魅力」群が多く、大学生では「自己承認」群や「人間的成熟」群が多いことが明らかとなった。

次に、自己の重要領域ごとに劣等感8得点を算出したところ、中学生で多かった「知的能力」群で「学業成績の悪さ」得点が高く、高校生で多かった「対人魅

力」群では「身体的魅力のなさ」得点が、大学生で多かった「自己承認」群では「友達づくりの下手さ」得点が、8領域の中で最も高い得点を示していることが明らかとなった。また、「優しさ」群や、大学生で多かった「人間的成熟」群では、ほとんどの劣等感得点が低いことも明らかとなった。

これらの結果から、自己の重要領域によって強く感じられる劣等感が異なること、そして、青年期を通して青年の重要領域は変化し、それに伴ってそれぞれの種類の劣等感を感じる程度が変化することが明らかとなった。

中学生では知的能力が重要領域であり、そのため、学業成績が悪いことによる劣等感を強く抱いていた。現在、高校進学率は95%を超え、「一般的には中学生の早い時期から、子ども・青年の意識と生活が、家族や教師の意識・生活も含めて、受験を中心に組み立てられている」(菊池, 2000) 状況にある。良い学業成績を修めることが、周囲からの承認・賞賛を集めると同時に、中学生自身の自尊感情を高めている(遠藤・西, 1993; 岩井・小田, 1986)。このような現状において、中学生が知的能力を自己の重要領域とみなすようになり、また、学業成績が悪いことが劣等感を生じさせる要因となりうるであろう。「学業成績の高いことはよいことだ、という価値観があるから、成績の悪いことに劣等感をもつのである」(国分, 1975) という指摘の通りである。

「対人魅力」群が多かった高校生の時期は、異性への興味・関心が高まるが、異性への依存欲求が満たされない時期である(落合, 1997)。「恋愛はこの世でいちばん大切なものだ」という意見に、高校生の半分以上が賛成し(第一学習社, 1991)、異性交際も高校生以降で増加することが指摘されている(大野, 1999)。「青年期の心理的安定は、異性との間に親しい関係がもてるか否かに関わる面が大きい」(返田, 1986) ことが、他の時期に比べ高校生が、他者、特に異性に対して魅力的であることを重視している理由であろう。「対人魅力」群の記述の多くが「かわいい(かっこいい)人間」や「スタイルのよい人間」のように外見に関する記述であり、また、社会的比較研究において高校生では「容姿・服装」に関する比較が多くされている(高田, 1994 など) ことから、ここでの「魅力」とは外見的・身体的魅力の意味合いが強いと考えられるが、青年の身体的魅力に対する評価は必ずしも高いものではない。島(1988)では、高校生221名のうち、自分の容姿を「優れている」、「非常に優れている」と評価した者が34名(15.4%)であったのに対し、「劣っている」、「非常に劣っている」と評価した者

は91名(41.2%)であった。そもそも「青年期の劣等感の中で、容姿や容貌がかなり重要な要因として作用している」(返田, 1986) という指摘の通り、多くの青年が外見や身体的魅力に劣等感を抱いているが、「対人魅力」群で身体的魅力のなさによる劣等感が強く感じられるのは、他者に対する身体的・外見的魅力を重要領域としているにもかかわらず、自分の容姿や容貌を魅力的であると評価できないというズレから生じているのであろう。

大学生では、「人間的成熟」群が最も多く、この「人間的成熟」群は、劣等感8得点のうち6得点が全体平均以下であった。北村(1962)は「他の人々に比較対比して自己を評価し、少しでも優位に立とうとする志向・態度を去って、真に自分らしい自己であること、自己の内的可能性を十分に顕現・展開してゆくことに、真の価値をおく態度」をもつことで劣等感から解放されることを指摘している。「人間的成熟」群の記述は、このような態度を求める姿勢であると考えられる。青年期後期(大学生)になり、自己の成長、内的可能性の顕現化を求めるようになった青年は、他者との比較や競争から脱して、徐々に劣等感を低減させることができるようになるのであろう。

溝上(1999)は、自己が否定的になる問題領域として、性格・学業成績・身体・人間関係のように、自己のあり方が現状での生活に直接関わってくる「水平軸の問題領域」と、将来の職業・結婚・生き方のように、一瞬先以降の未来の自己のあり方ではあるが、現在の自己にとって問題になってくる「垂直軸の問題領域」という視点を提示している。中学生は知的能力を重要領域とみなし、学業成績に対する劣等感が高く、高校生は対人魅力を重要領域とみなし、身体的魅力に対する劣等感が高かったのに対し、大学生では自己の成熟が重要領域となり、それに伴ってほとんどの劣等感が低下していたという本研究の結果を考慮すると、劣等感とは、溝上(1999)の「水平軸の問題領域」に関わる感情であると考えられる。

本研究のまとめ 以上から本研究の結果は以下のようにまとめられる。自己の重要領域は、青年期前期(中学生)では知的能力のように“他者に認められる”ことに焦点化した領域であり、中期(高校生)では、対人魅力のように“他者にみせる”ことに焦点化した領域へと変わり、後期(大学生)になると、“自分自身を認める”ことや“自分自身を高める”ことに焦点化した領域へと変化する。それに伴い、前期では、知的能力の表れである学業成績の悪さに劣等感を感じ、中期では、他

者をひきつけるための身体的魅力がないことに劣等感を感じている。そして、後期(大学生)になり、自分で自分自身を認める助けとなる友達を上手くつくれないうことに劣等感を感じるが、さらに自らを成長させようとするのが重要視されるようになると、劣等感は強く感じられなくなると言えるだろう。

本研究の限界と今後の展開 本研究では、学校段階を発達指標として、自己の重要領域の変化とそれに伴う劣等感の変化について検討した。しかし、本研究の結果は、平均値を用いた全体的な傾向であり、特定の劣等感に長期間苛まれていた青年がいることも事実である。劣等感の解消・克服や、その指導に当たっては、青年個々の特徴を踏まえる必要がある。また、本研究では横断調査を実施したが、各学校段階間の社会的・学業的水準の等質性が保たれているかどうかという点には問題が残る。縦断調査や回顧法など、社会的・学業的水準や学業水準の等質性を考慮した調査結果を積み上げていく必要がある。

引用文献

- Allport, G. W. (1939). *Personality*. New York : Henry Holt. (詫摩武俊・青木孝悦・近藤由紀子・堀 正(訳) (1982). パーソナリティ 新曜社)
- Bers, S. A., & Rodin, J. (1984). Social-comparison jealousy : A developmental and motivational study. *Journal of Personality and Social Psychology*, **47**, 766-779.
- 第一学習社 (1991). 現代高校生の恋愛観 第一学習社
- Elliot, A. J., Faler, J., McGregor, H. A., Campbell, W. K., Sedikides, C., & Harackiewicz, J. M. (2000). Competence valuation as a strategic intrinsic motivation process. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **26**, 780-794.
- 遠藤由美 (1992). 自己認知と自己評価の関係—重みづけをした理想自己と現実自己の差異スコアからの検討— 教育心理学研究, **40**, 157-163. (Endo, Y. (1992). Personalized standard of self-esteem. *Japanese Journal of Educational Psychology*, **40**, 157-163.)
- 遠藤由美・西 芳弘 (1993). 青年前期における自己評価の研究—認知された自己の諸領域との関連— 上越教育大学研究紀要, **13**(1), 111-119.
- Gardner, G. E., & Pierce, H. D. (1929). The inferiority feelings of college students. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, **24**, 8-13.
- 郷古英男 (1972). 非行少年にみる自信の欠如—不適応感・補償行動・非行化という観点から— 児童心理, **26**(9), 124-129.
- 井上信子 (1987). 小・中学生における優越・劣等意識 相談学研究, **19**(2), 38-43. (Inoue, N. (1987). Superior and inferior feelings of children in primary, and junior high school. *Japanese Journal of Counseling Science*, **19**(2), 38-43.)
- 岩井勇児・小田昌世 (1986). 中学生の自尊心と学業成績の評定 愛知教育大学研究報告, **35** (教育科学編), 85-97.
- 菊池則行 (2000). 受験 久世敏雄・斎藤耕二(監) 福富 護・二宮克美・高木秀明・大野 久・白井利明(編) 青年心理学事典 (p.308) 福村出版
- 岸田元美 (1951). 児童における劣等性意識とその要因 児童心理, **5**(9), 66-75.
- 北村晴朗 (1962). 増訂 自我の心理 誠信書房
- 国分康孝 (1975). 劣等感の精神分析 児童心理, **29**(11), 102-106.
- 國眼眞理子 (1997). 男の子の劣等感・女の子の劣等感 児童心理, **51**(7), 37-41.
- Kuhn, M. H., & McPartland, T. S. (1954). An empirical investigation of self-attitudes. *American Sociological Review*, **19**, 68-76.
- McGuire, W. J., & Padawer-Singer, A. (1976). Trait salience in the spontaneous self-concept. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, **47**, 624-625.
- 三田英二 (1988). Self-Esteemに関する研究(3)—重視される自己の諸側面との関係について— 臨床教育心理学研究, **14**, 25-29.
- 宮城音弥 (1979). 劣等感 朝日新聞社
- 溝上慎一 (1995). WHY 答法についての理論的考察 大阪大学教育心理学年報, **4**, 61-72.
- 溝上慎一 (1999). 自己の基礎理論—実証的心理学のパラダイム— 金子書房
- 水間玲子 (2000). 劣等感 久世敏雄・斎藤耕二(監) 福富 護・二宮克美・高木秀明・大野 久・白井利明(編) 青年心理学事典 (p.213) 福村出版
- 水間玲子 (2004). 理想自己への志向性の構造について—理想自己に関する主観的評定との関係から— 心理学研究, **75**, 16-23. (Mizuma, R. (2004). A study on the structure of the inten-

- tion to become ideal selves : From the viewpoint of the relationship to subjective ratings of ideal selves. *Japanese Journal of Psychology*, **75**, 16-23.)
- Moretti, M. M., & Higgins, E. T. (1990). Relating self-discrepancy to self-esteem : The contribution of discrepancy beyond actual-self ratings. *Journal of Experimental Social Psychology*, **26**, 108-123.
- 西平直喜 (1964). 青年分析 大日本図書
- 落合良行 (1994). 青年期を中心とした生活感情の研究 橋口英俊 (編) 児童心理学の進歩—1994年版—(pp. 195-226) 金子書房
- 落合良行 (1997). 青年期における生活感情の構造に関する解明 基盤研究 (C) (2) 研究成果報告書
- 大野 久 (1999). 人を恋するという事 佐藤有耕 (編) 高校生の心理—①広がる世界 (pp. 70-95) 大日本図書
- Rogers, C. R. (1951). *Client-centered therapy : Its current practice, implications and theory*. Boston : Houghton Mifflin.
- 澤田匡人・新井邦二郎 (2002). 妬みの対処方略選択に及ぼす、妬み傾向、領域重要度、および獲得可能性の影響 教育心理学研究, **50**, 246-256. (Sawada, M., & Arai, K. (2002). Dispositional envy, domain importance, and obtainability of desired objects : Selection of strategies for coping with envy. *Japanese Journal of Educational Psychology*, **50**, 246-256.)
- 関 計夫 (1981). 劣等感の心理 金子書房
- 島 久洋 (1988). 青年の容姿と適応感 青年心理学研究, **2**, 12-25.
- 返田 健 (1986). 青年の心理 教育出版
- 高田利武 (1992). 他者と比べる自分 サイエンス社
- 高田利武 (1994). 日常事態における社会的比較の様態 奈良大学紀要, **22**, 201-210.
- 戸川行男 (1952). 劣等感 依田 新 (編) 教育心理学講座第1巻 適応の心理 (pp. 83-111) 金子書房
- 塚野州一・水島直純 (1997). 劣等感の変容プロセスの検討 日本教育心理学会第39回総会発表論文集, 188.
- 山田ゆかり (1989). 青年期における自己概念の形成過程に関する研究—20 答法での自由記述を手がかりとして— 心理学研究, **60**, 245-252. (Yamada, Y. (1989). A study of the process of self-concept formation in adolescence : An investigation of self-descriptions using the Twenty Statement Test (TST). *Japanese Journal of Psychology*, **60**, 245-252.)
- 山本真理子・松井 豊・山成由紀子 (1982). 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, **30**, 64-68. (Yamamoto, M., Matsui, Y., & Yamanari, Y. (1982). The structure of perceived aspects of self. *Japanese Journal of Educational Psychology*, **30**, 64-68.)
- 安塚俊行 (1982). 劣等感の構造(1)—予備的研究— 幾徳工業大学研究報告A人文社会科学編, **6**, 15-19. (Yasuzuka, T. (1982). The structure of inferiority feelings (1) : A preliminary study. *Research Reports of Ikutoku Technical University, Part A : Humanities and Social Sciences*, **6**, 15-19.)
- 安塚俊行 (1984). 劣等感の構造(3)—予備尺度の検討— 幾徳工業大学研究報告A人文社会科学編, **8**, 25-30. (Yasuzuka, T. (1984). The structure of inferiority feelings (3) : A study of the preliminary scale. *Research Reports of Ikutoku Technical University, Part A : Humanities and : Social Sciences*, **8**, 25-30.)

(2006.11.9 受稿, '08.1.10 受理)

Developmental Changes in Inferiority Feelings in Adolescents and Young Adults : Important Areas of the Self

YASUMASA KOSAKA (INSTITUTE OF COMPREHENSIVE HUMAN SCIENCE, TSUKUBA UNIVERSITY)

JAPANESE JOURNAL OF EDUCATIONAL PSYCHOLOGY, 2008, 56, 218-229

The present study investigated developmental changes in inferiority feelings in adolescents and young adults, in relation to important areas of the self, using a cross-sectional design. Participants, junior high students (7th, 8th, and 9th, grades, $N = 204$; average age 13.25), senior high students (10th, 11th, and 12th grades, $N = 173$, average age 16.27), and university students ($N = 172$, average age 19.88), completed a questionnaire of 50 items measuring inferiority feelings that had been selected from a preliminary survey, and also wrote a description of important areas of the self. Factor analysis extracted the same 8 factors relating to inferiority feelings that had been extracted in the preliminary survey. The descriptions of the self were classified into 10 categories, and the relation between the important areas of the self and the inferiority feeling scores investigated. The results were as follows: (1) the junior high school students regarded intellectual abilities as an important area of the self, and had inferiority feelings regarding poor grades in the school, (2) the senior high students regarded personal attractiveness as an important area, and had inferiority feelings regarding bodily attractiveness, and (3) the university students regarded self-approval as an important area, and had inferiority feeling about the lack of social skills. However, those university students who regarded maturity as an important area did not have strong inferiority feelings.

Key Words : inferiority feelings, important areas of the self, adolescents, young adults